

# 平安京右京七条一坊七町跡発掘調査現地公開資料

2016年4月17日

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所在地：京都市下京区朱雀分木町60番地ほか

調査期間：2016年2月1日～4月28日（予定）

## はじめに

調査区の西半が平安宮南面の皇嘉門こうかもんに通じる皇嘉門大路に該当し、東半は平安京右京七条一坊七町の宅地となります。調査は南北に分けて行い、北半の1区は調査を終了し、現在は南半の2区の調査を継続中です。

## 見つけた遺構

**溝65** 調査区西半、推定皇嘉門大路東築地心ついでの西側で見つかった南北方向の溝です。幅約4.0m、深さは約0.7mあり、皇嘉門大路の東側溝と考えられます。溝の東肩部からは多量の瓦が出土しました。また、溝の底からは銭貨や馬の骨が出土しました。溝の西肩部で見つかった土坑68にはほぼ完形の須恵器の小壺が納められていました（写真2）。地鎮を行った可能性があります。

**溝58** 調査区東半、推定皇嘉門大路東築地心の東側で見つかった南北方向の溝です。幅約9.0m、深さは約0.4mあり、皇嘉門大路の宅地側の内溝と考えられます。溝の西肩部からは多量の瓦が出土しました。

**流路40** 調査区東側で見つかった北東から南西方向に流れる流路です。幅約8.0m、深さは約0.6mあります。弥生時代の土器が出土しました。

## 今回の調査成果

皇嘉門大路東側溝と考えられる溝65と内溝と考えられる溝58から多量の瓦が出土し、この間に瓦葺きの築地塀が存在したと考えられます。出土した瓦の中には、軒先を飾る軒瓦のしむねが1点もなく、半分に割られているものが多いことから、いわゆる熨斗棟のしむね（図3参照）を乗せた築地塀であったと推測されます。また、溝65と溝58の両方で地震痕跡（写真3）が見つかり、この築地塀は地震で倒壊した可能性があります。溝から出土した土器の年代から9世紀半ば以降の地震痕跡と考えられます。文献史料には9世紀後半から10世紀にかけて大きな地震が複数回あったとの記録があり、そのどれに該当するのかは今後の検討課題ですが、皇嘉門大路に瓦葺きの築地が存在したと平安時代前期の地震痕跡を確認できたことは大きな成果と考えています。

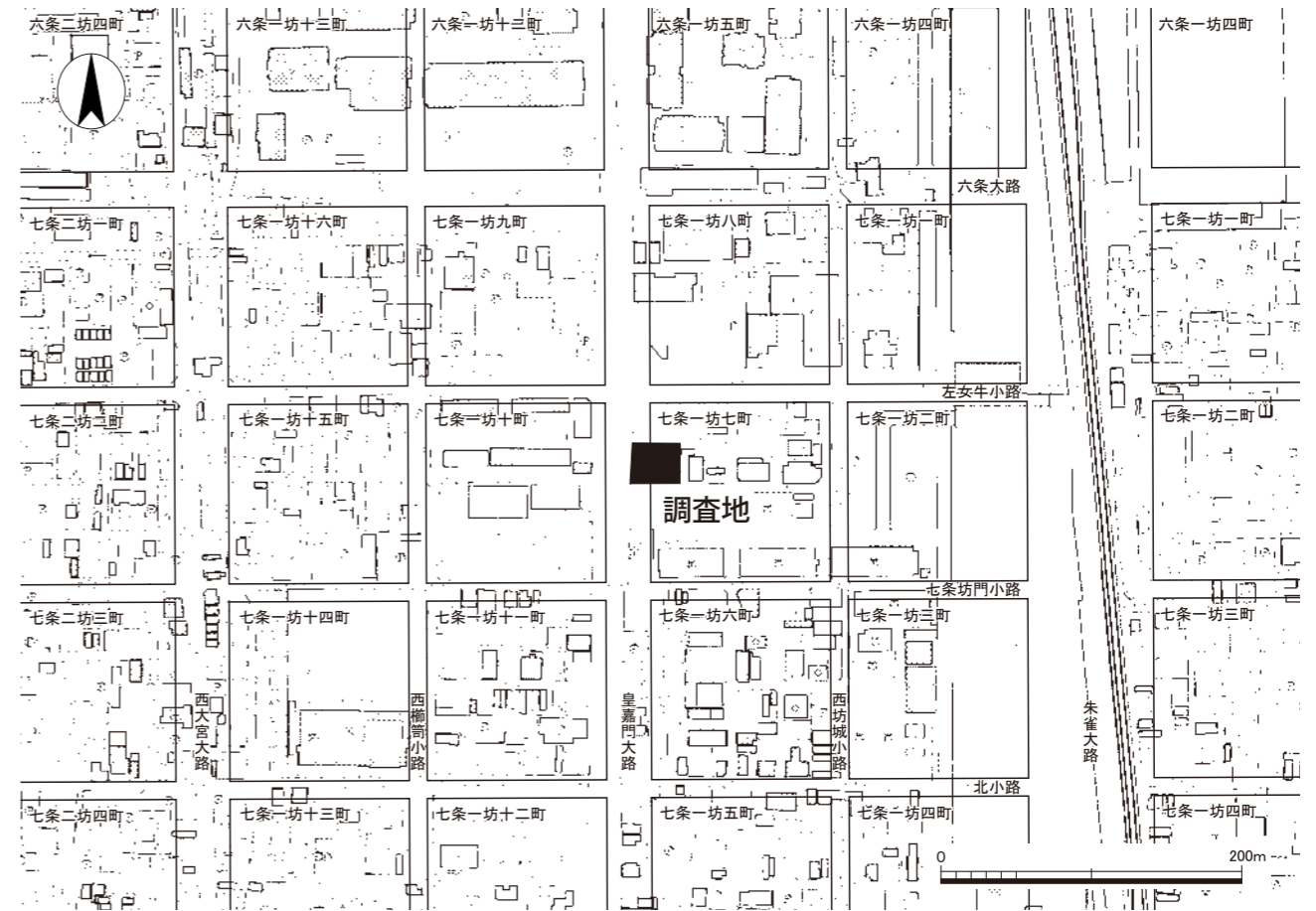


図1 調査位置図（1：5,000）

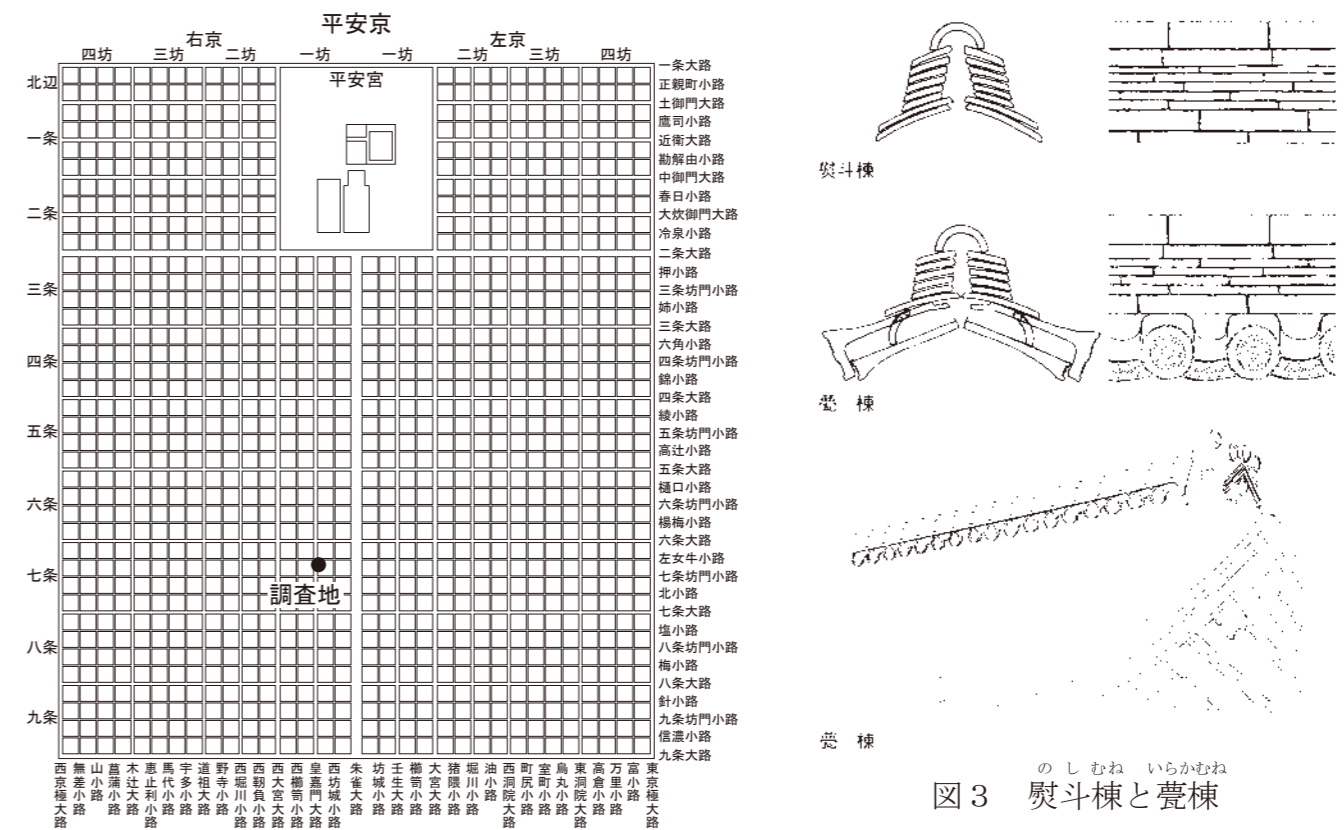


図2 平安京条坊図

※文化庁文化財部記念物課監修「発掘調査の手引き」同成社 2013年 より

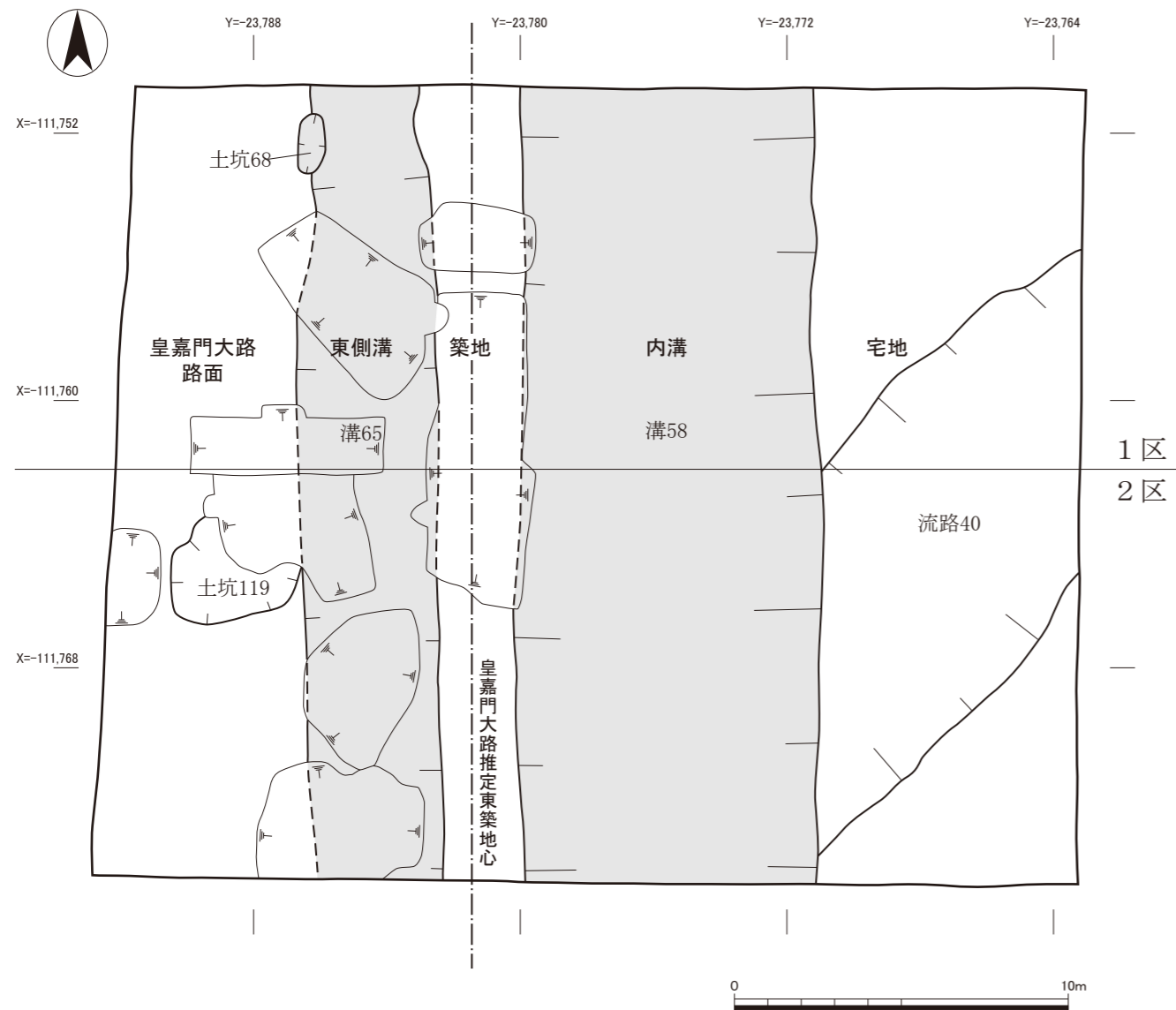


図4 調査区平面図 (1 : 200)



写真1 2区全景 (北東から)



写真2 土坑68土器出土状況 (西から)



写真3 溝65地震痕跡検出状況 (北から)

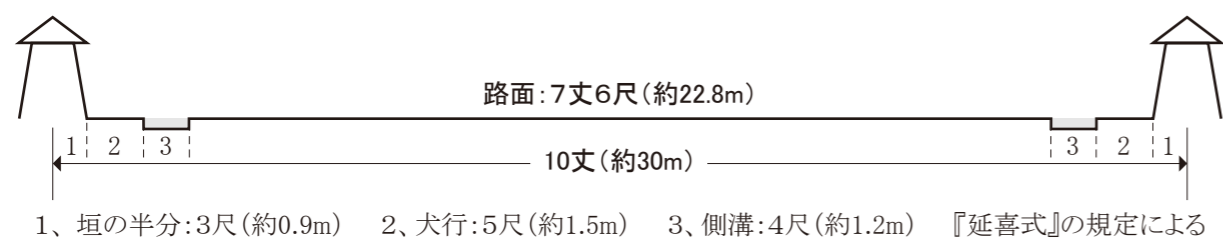


図5 皇嘉門大路断面模式図 (1 : 200)